

掲載コンテンツのご紹介

令和元年度に追加しました、5本の地域映像の概要をご紹介します。
実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。



ふくしまけん こおりやまし こおりやまし してい じゅうようむけい みんぞく ぶんかざい
福島県郡山市<郡山市指定重要無形民俗文化財>
きたたかくらのししまい
「北高倉の獅子舞」

郡山市の東方に位置する中田町には、古くから伝わる獅子舞があり、古文書に依れば、享保の頃から始められたとある。中田町の獅子舞は地域毎に「北高倉」、「南高倉」と称され、昔は互いに争ったこともあるそうだが、春は「北高倉」、秋は「南高倉」が当番となって、それぞれ「菅布禰(すがふね)神社」に舞を奉納している。

舞子は八才~十八才の長男と定められている。構成は「太郎獅子」「次郎獅子」「女獅子」「金切(ひよっこ)」となっている。演目は「女獅子舞」「次郎獅子舞」「太郎獅子舞」など11演目が約一時間かけて舞われる。

当日は、衣装を着けた宿の近くで、最初の舞を披露し、次いで本番の「菅布禰神社」への奉納舞が行われる。

(広報・普及編)



ふくしまけん にほんまつし にほんまつし むけい みんぞく ぶんかざい
福島県二本松市<二本松市無形民俗文化財>
もぼら ししまい さんびきししまい
「茂原の獅子舞(三匹獅子舞)」

この獅子舞は日山(ひやま)の麓の茂原地区に伝わる三匹獅子舞であり、平成11年(1999年)市無形民俗文化財に指定された。毎年10月上旬に、日山山頂に祀られている「旭神社(日山神社)」他にて奉納される。

獅子舞の構成は「太郎獅子」「次郎獅子」「雌獅子」「ささらすり」の4名で、演目は「舞出(まいだし)」「岡崎(「おかざき)」「花吸い」「六調子」「唄切り」「田草(田の草)」「掛也(かけや)」「とうどのめ」「舞終(舞終い)」「お暇ま(おいとま)」がある。奉納一日目は茂原公会堂で衣装を着け、ひと庭舞ってから日山へ向かう。途中、鳥居の前で「舞出し」を舞った後、日山へ登り旭神社で祈祷と舞の奉納をおこなう。この他、田沢と葛尾の日山神社にも参拝し「参詣」を舞う。下山後は再び鳥居の前、公会堂で舞い、直会(なおらい)となる。奉納二日目は公会堂でひと庭舞った後、「熊野神社」で祈祷と舞の奉納をおこなう。午後の奉納の後は再び公会堂で舞い、直会となる。

当地ではささらを「千穂(せんぼ)」ともいい、すりささらの一方が極端に大きくなったもので、これを用いるのはこの地方と一部の周辺だけである。一説には稲穂を象ったともいい、豊作祈願が込められている。



いばらきけん ちくせいし いばらきけん してい むけい みんぞく ぶんかざい
茨城県筑西市<茨城県指定無形民俗文化財>
「小栗内外大神宮の太々神楽」
〜御厨の里の岩戸神楽〜

江戸中期の寛延4年(1751年)山城国三嶋神社の神主らより伝授されたこの神楽は、江戸期の終わり頃、伊勢神楽師の指導を受けて、現在の12神楽36座として成立した。これは、12の場面に36柱の神々が登場することを意味している。番外として八岐大蛇(やまたのおろち)退治もある。(太々神楽とは日本の神話を題材にした神楽の総称)本サイトにも太々神楽はいくつか登録されているが、これほど多くの演目が整然と演じられているところは少ない。

この神楽は、小栗の内外大神宮(国指定重要文化財)に奉納されるが、同大神宮は伊勢神宮と同じく内宮に天照大神、外宮に豊受(とようけ)大神を祀っている。神楽は、宮比講(みやびこう)として神社近郊の人々が舞を奉納してきたが、現在では「太々神楽保存会」が行っている。

神楽の奉納は春と秋に行われ、春は4月21日の直前の日曜日、秋は11月10日の直前の日曜日となっている。



ちばけん たてやまし
千葉県館山市
「館山市の御船歌」

館山(たてやま)市の御船歌は、新井(あらい)、柏崎(かしわざき)、相浜(あい はま)の3ヶ所に伝わる。「新井の御船歌」(市指定無形民俗文化財)は、初午と8月1日・2日の館山の祭りで上演される。演目は「木更津山(きさらづやま)」「是(これ)のつぼね」で、館山神社や地区内で御船の出発前に歌う。「柏崎の御船歌」(市指定無形民俗文化財)は、オビシヤと8月1日・2日の館山の祭りで上演される。オビシヤは「正月くどき」、8月の祭りでは「皇帝」を國司(こくし)神社等で歌う。「相浜の御船歌」は、3月に行われる相濱(あい はま)神社の祭りで上演される。かつては、袴を着た子どもを御船の舳先に乗せ、家々をまわって御船歌を歌っていた。演目は「初春」「八幡くどき」等9曲が残る。本編では上記3地区の御船歌が紹介されている。



とくしまけん みよしし
徳島県三好市
「加羅宇多姫伝説」

本編舞台となる三好市祖谷地方には、平家落人伝説をはじめとする説話伝承が数多く残されている。その中でも西祖谷吾橋(にしいやあわし)地区の「加羅宇多姫伝説」には、背景となる歴史資料、信仰対象となった岩山、伝説にまつわる社や鏡が存在している。

「加羅宇多姫伝説」とは、元弘の変により土佐幡多郡に流された後醍醐天皇の第一皇子「尊良親王」(たかながしんのう)の後を追ひ、京から土佐に向かった身重の妃「加羅宇多姫」が、道中の西祖谷田ノ内で若宮を出産するも御子がまもなく亡くなった。これを憐れんだ村人たちが、西祖谷一宇に若宮神社を建立し若宮を祀った。加羅宇多姫はその後も尊良親王を目指し旅を続けていたが、土佐杖立において親王が九州へ出立されたとの報を聞かされる。もと来た道を引き返し京へ向かおうと西祖谷吾橋まで立ち戻った途中、産後の肥立ちも悪く、古宮嶽中腹の岩屋で亡くなってしまった。一行は悲嘆の涙にくれながらそこに加羅宇多姫のご遺骸を埋葬し菩提を弔った。その後村人はお墓のそばに社殿を建て、これを古宮神社とし加羅宇多姫を神として祀った。

本編では、この伝説を古宮神社の境内にて演じている。